



TITLE:

静脩 Vol. 4 No. 3 (1967.9) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 4 No. 3 (1967.9) [全文]. 静脩 1967, 4(3)

ISSUE DATE:

1967-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65920>

RIGHT:

図 書 館 雑 感

川 口 桂 三 郎

この夏図書館本館に冷房が入ったのは最近の快ニュースである。どなたが推進されたのかは知らないが、多少は障害もあったことだろうから、御英断のほどに大いに敬意を表したい。暑い京都で夏を送った学生諸君にとっては、百万言の“読書の奨め”よりも有効であつたらう。新聞によると、その恩恵が他大学の学生にまで及んでいる由で、ますます結構なことといわざるをえない。もっとも冷房などは図書館本来の使命とは関係のうすいことで、学生の厚生面の問題である。しかし大学におけるこの方面の施設が非常に遅れているのだから、冷房一つといえどもその意義は大きい。

近代図書館の本来の使命となると、まず利用面では、図書館職員が利用者の資料の検索に対して強力な指導力を持つことが必須の条件とされているようである。しかし一般の公共図書館と違い、大学図書館においてはこうしたことの実現は非常に困難であり、またさしあたって必要とも考えられない。

図書館の内容については、当然のことながらその充実がいよいよ必要となってくる。ことに生活様式の変化に伴って個人で膨大な蔵書を持つことが困難となり、また少なくとも自然科学にたずさわっている大部分の者にとって完備した図書館がある場合は、個人の持つ蔵書の意義は急速に薄らいできている。私自身についていえば、月々送られてくる専門の雑誌類も必要なカードをつくれれば（これがなかなかできないが）、あとはすててしまい、必要な時には研究室なり図書室のものを利用することにしている。したがって図書館に対する依存度ははなはだ大きい。ただ図書館といっても地理的に離れている関係もあって、中央図書館は利用しにくいし、また利用する必要もない。したがって図書館への関心をもっぱら学部図書室のことになるのは当然である。

ところで農学部図書室は事情があつて、昭和39年3月まで十数年にわたって図書室としての機能がとまっていた。同年の4月からにわかに活動がはじまり、3、4年の間にどうか図書室らしい体裁と機能が備わってきた。しかし長い間の図書室に対する不信感と各研究室が学部図書室なしにやってきたことが、学部図書室の発展の上に大きな妨げになっている。各教室でもっている図書室（雑誌室）を統合して、総合的な学部図書室をつくることなどは

当分むずかしそうである。

学部図書室として今後の貢献の道は、今まで以上の内容の整備とともに新しい仕事としてはパンフレットや謄写印刷物などの収集整理であろう。このような出版物は、公式の文献としては認められないものもあるが、一方研究上の資料としては極めて価値の高いものもある。国外のものはもとより、国内のものも雑誌や単行本とちがって、多くは再入手が不可能に近い。どうやら周囲の研究室でも、この種の膨大な資料が部屋のすみにねむっている様子である。ただ素人の個人が整理をするのは、時間的にも技術的にもまず不可能である。専門家の意見をきくと、私の学部の場合は職員1名(?)あれば十分だそう。調査旅行から帰ったあと、集めた資料を図書室に引渡しさえすればことが済むとなれば、さぞかしさっぱりするだろう。まして他の人のお役にたつこともでき、図書室も金をかけずに充実するのだから一石三鳥ともいえる。この仕事はまだどの図書館(室)も手がけていないそうである。その理由の一つは金を出して買ったものは保管に責任をもてるが、ただのものはどうも力が入らないという。冗談でしょうね。

(農学部教授)

新村先生の御蔵書

浜 田 敦

私が物心ついた頃から、ずっと長い間、京大の総長といえば荒木、図書館長は新村ということになっていたような記憶がある。それもそのはず、新村出先生が、教授としては初代の、図書館長になられたのは、明治末年私の未生以前のことに属し、停年退官と共にそれを辞されたのが、丁度私の大学に入学した昭和11年の秋だったのである。このように、新村先生は京大御在任のほとんど全期間を通じて図書館長を兼ねられたのであるが、これは、先生が全くその職に御適任であったことを物語るものといってよい。先生がまだ学生の頃は博言学とよばれた、その御専攻の学問の必要上からも、和漢洋の古今にわたる文献に精通され、また趣味としても、こよなく書物を愛された先生であった。その御著書、論文の過半は、何等かの意味で、本に関することが問題となっていたといえるであろう。

しかし、本に親しみ、本を愛された先生ではあったけれども、一部のいわゆる愛書家に見られるように、書に淫するとでもいうべき、私蔵欲、物質的執著は一切持たれなかった。従って、先生の御蔵書には、珍本、稀覯書というべきものは全く見られず、すべては、学問の必要から購入され、あるいは、門下生などから献呈された、実用的な本ばかりであった。戦争も漸く末期に近く、京都でも家財などの疎開が問題になった頃、毎週一度お仕事のお手伝いに行っていたそのある日、何かの話しの序に、自分の蔵書には疎開しなければならないような珍本としては何もないが、少しでも人の役に立つものをより安全な場所へ移したいとは思っても、書齋、書庫の整理さえ、この年では思うにまかせぬとお言葉に、それなら私がお手伝いいたしましよと申出て、当時研究室につとめていた徴用のがれのお嬢さん方数人を引きつれて、一週間ばかりもかかって、先生のお宅の書庫の隅々までひっくりかえして大掃除をしたことがあった。

そのお蔭で、私は先生の御蔵書に精通し、先生から逆に、あの本はどこにあったかねとた

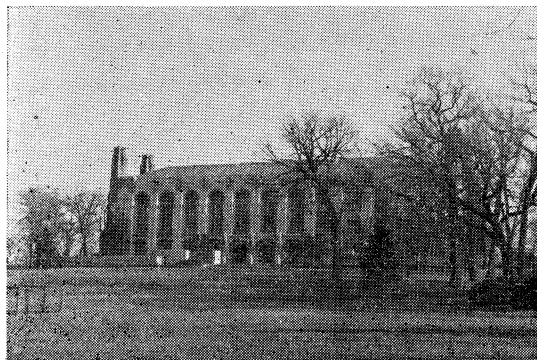
ずねられ、即座に、どの本棚の何段目のどの辺にありますとお答え出来るようになったのである。その時感じたことは、まず、当然のことながら、先生の御蔵書が実に多方面にわたり豊富なことであるが、しかもそれが先生も仰有るようにすべて実用的な普通の本ばかりであり、一冊一冊が隅々まで丹念に目を通されている証拠に、しおりの紙が沢山挿み込まれ、方々に御自筆の墨、朱、インキ、鉛筆など各種の書き込みがなされており、決してソンでおかれたものでなく、常に使用されていることが、なまなましく感じられるものばかりであることだった。これは、学者の蔵書としては別に不思議ではないはずであるが、特に国文学関係の学者の中には、珍本を蒐めることに夢中で、それがただちに学問であるかのように錯覚している人も少なくないのに思い比べて、深い感銘を覚えたのである。

それから数年、戦争も終り、先生の御蔵書も京都の町と共に無事残ったが、新制大学発足に伴い、はからずも私が勤めることになった大阪市立大学の図書館を充実するために、先生の御蔵書の幾分を御割愛頂ければとお願いしたところ、二つ返事で御快諾下さったのである。現在、その図書館に、新村文庫と名づけられて、ながく先生の学徳を偲ぶよすがとして、蔵されている数千冊の本がこれである。
(文学部教授)

本館の第3代館長として明治44年より昭和11年まで、26年の長きにわたり、図書館の発展をみちびかれた名誉教授新村 出先生は、去る8月17日午後7時、90才の長寿を全うされ逝去されました。ここに、生前の先生を偲ぶ意味で、浜田教授に御寄稿を頂きました。

外国の大学図書館

NORTHWESTERN 大学の図書館



新 宮 秀 夫

ノースウェスタン大学はシカゴの北約20キロほどのミンガン湖畔のエバンストンという町にあります。創立は1851年で現在学生数は約1万人です。主な図書館は中央図書館、医学部図書館と理工系図書館の3つで、もちろん中央図書館が一番大きいのですが、建物がすでに古く、狭

くなったので、現在数千万ドルという予算で新館を旧図書館の裏に建てているところです。蔵書数は知りませんが、旧館の規模は大体京都大学の中央図書館位でした。現在は書庫には普通入れないことになっていますが、新館ができるとすべて開架式になるようです。医学部はシカゴにあります。図書館は十数階建のビルの一階の一部にあり、蔵書が多いことが自慢だったようです。ビルそのものが新しく、書庫も閲覧室も余裕が充分あって気持ちよい雰囲気でした。開架式ですが、医学部関係の者以外は特別の許可がないと図書館に入ることはできません。理工系の学科は全部ひとつづきの建物に入っており、図書館が一番上の四階の一部にあります。約300人入れる閲覧室と四階ある書庫があり、書庫には自由に入ることがで

きます。書庫の各階に CARREL といってひとつずつ仕切りをして机と椅子が約20ずつ置いてありちょっとした調べものは書架から書物を抜いてその場で用を足すことができます。大学院学生と職員は図書館の鍵を持つことができるので、夜11時に閉館になったあとも、この CARREL で文字通り書物に埋って頑張っている学生もいます。一般図書の貸出し期間は4週間で、延期するのを忘れると罰金という規則になっています。新刊書と雑誌は貸出し禁止で、したがって文献調べの際求める VOLUME が抜けているため、それを探し回るという手間はないわけです。利用上特に便利だと感じたのは、自分の専門以外の雑誌や書物も、理工系のものではすぐに利用ができることで、これは工学部、理学部のしかも学科ごとに建物が分れ、それぞれの小図書館を持っている京都大学の場合と対照的でした。

以上簡単ですが気のついたことのみ書いてみました。利用したのはほとんど理工系の図書館のみでしたが、3年間利用した感想を最後に述べますと、いつでも自分の好きな時間に気軽に利用できたこと、求める本があるべき場所にいつでもあったことなどのため非常に便利だったということです。

(工学部教官)

告 知 板

——参考図書室の拡充と

目録カード室の移転について——

本館では参考図書室の座席数と参考図書の拡充整備を図るため、部屋の改装を行なって来たが、このほど工事を完了した。これにより参考図書室はスペースにおいて約1倍半に拡大された。参考図書資料群も漸次充実してゆく計画であるから今後利用の便宜が一段と向上するものと期待される。

またこの参考図書室の拡充に伴ない、従来の閲覧用目録カード室が移転し、次のように整理統合されたのでご承知いただきたい。

- A 全学総合目録 (1階カード室)
 - 1 全学和漢書・書名目録
 - 2 全学和漢書・著者名目録
 - 3 全学洋書・著者名目録
- B 分類目録 (2階閲覧室前)
 - 1 本館和漢書・分類目録
 - 2 法経和漢書・分類目録
 - 3 本館洋書・分類目録

資 料

教官文庫新着紹介 (7月—8月御寄贈の分)

- 「社会思想史」出口勇蔵著 (経済学部教授) 筑摩書房 昭42刊 309 P
- 「経済生活を動かすもの」鎌倉 昇著 (経済学部助教授) 講談社 昭42刊 191 P
- 「生体量子化学」福井謙一編 (工学部教授) 共立出版 昭42刊 450 P
- 「内縁の研究」太田武男著 (人文科学研究所助教授) 有斐閣 昭40刊 955 P
- 「文化人類学」姫岡 勤著 (教育学部教授) ミネルヴァ書房 昭42刊 236 P

「静脩」と交換されている

他大学の図書館報

「静脩」には他の国立大学図書館で生れたたくさんの兄弟がいる。文字通り兄弟なので、「静脩」より先に生れたものもあれば、あとから生れたものもあるし、親が国であることにかわりはなくても、それぞれに性格もことになっているのは当然である。学内の図書館関係者を対象にしたもの、新着図書月報を中心としたもの、利用者との対話を主としたもの、月刊あり、隔月刊あり、旬刊あり、その性格はさまざまである。

その内当館と交換しているものを北から南の順で御紹介すると、北海道大学の「楡蔭」、北海道教育大学の「図書館報」、岩手大学の「図書館時報」、東北大学の「図書館通信」、群馬大学の「図書館報」、東京大学の「図書館の窓」、東京学芸大学の「図書館月報」、大阪大学中之島図書館の「ナカトニュース」、神戸大学教育学部分館の「図書館」、徳島大学蔵本分館の「MLニュース」、九州大学の「図書館情報」などである。なお、これらの館報を見たい方は、閲覧事務室参考掛まで。

学部図書室に望む

——特に自然科学系の場合——

近年における科学の発展にともなって、研究分野も細分化してきている。人間によって自然の理念が究明され、数々の着想のもとに科学体系が築き上げられてゆく。未知の世界へのさぐりのメスは、先人の築き上げた体系が大きな着想のよりどころとなる。その着想の基本となる歴史を通じての図書は、それぞれの研究分野にあって専門化して整理され保管されなければならない。

各学部には総合的な図書室があり、各学科、研究室にも専門書を中心とした図書が揃えられ、そしてまた研究者は各々に専門書を購読する。そのうちにはかなり重複するものもあるが、自分の手下に図書をもちたいという希望は研究者にとって、偽らざる気持というようなものである。現在にみる学部の図書室があまりにも多面にわたって図書を集約せんがために、専門書が少なすぎる傾向にあり、ただに文献雑誌・論文の保管場所ともみられる上に、その文献等の種類が少ないために、おおよそ図書室での利用は少なく、図書室を通じて図書の在り場所を紹介してもらおうというケースが多いように思われる。そのために、各学部、各研究室へ図書の利用のために奔走する。これらが相まって、いわゆる学部における図書室の存在の影がうすれ、その当然の結果として各学科または研究室単位での図書の充実化がみられる故に、学部における図書室のあり方が考慮されるべき時点にあるのではないだろうか。

私的な意見であるが、学部学生のための図書室であり、また研究者のための図書室でもあるところとすると図書の充実性が欠ける原因があるように思う。

各学科において研究者のための図書を充実し、学部における図書室は、その総合管理保管をはかり、学部学生に主体をおいた図書の配備をすると共に百科図書の完備された特色がほしいと考える。

その他利用方法の面から思うことは、貸出された図書があるために、必要な時にいつでも調べられるという“よさ”がないことである。必らず図書がその場にいつでも備えられていることは大切なことと考える。かりに貸出しを許す場合でも、休暇中の貸出しはあっても学期中は、閉室前より翌朝までの一晩単位であってほしい。そうなるとその場で文献等の複写を必要とする場合が生じるが、現今ゼロックス印刷機が配備されて来ているから、図書を借り出し、自分の学科に戻り複写して返却するという手間を省くためにも、自分の属していない学部で、ゼロックスを利用できるような方法が講じられないものかと考える。（農学部一利用者）



農学部図書室



図書室は、農学部本館建物のほぼ中央、六角形の大講義室を改装したもので、学部の中央という位置の点をのぞいては、近代的な図書室としての機能を生かすに

は、あまりにも行きづまりだらけの条件のなかにおかれています。現在の2階閲覧室、1階事務室も、利用面と機能とをかんがえ、幾度かいかわっています。

自然科学系の学部中央図書室としては、京大のなかではまず最古のもので、雑誌類の整理に重点をおき、常にみやすいよう、使いやすいよう、その配列、整理、納庫には全員一丸となって努力しております。

定員10名たらずの少人数ではありますが、42年度よりは、法、経、文に遅れじと、自館登録にふみきるかたわら、閲覧面には、ベテラン職員を大量に配し、整備の不十分をカバーしながら懸命に努力してきています。一方、図書委員会の努力は、学部長、事務長をうごかし、予算もおおはばにふえ、附属図書館の助言もくわわり、旧態をしるひとからは、その変貌が驚嘆されていますが、その反面、学生達からは、「これが京大農学部の中央図書室か？」と、指摘され、まだまだ改善の余地がのこされています。

設備と図書は金で解決できるが、有能な図書館職員の経験と、寄贈される雑誌、資料の収集は、農学部図書室の命綱であります。

金もいらない、名もいらぬ、農学部図書室に骨をうずめてくれる若い図書館員の努力が、今日の農学部図書室を基礎として、明日の発展を約束しています。見てくれ。使ってくれ。農学部図書室を。

農学部図書室の書庫には、まだ一度もよまれたことのない資料が、相当あります。いま、若い図書館員が、はだかで、ほこりにまみれて、懸命に整理しています。是非、あなたの手で、これらの資料に、日の目をみせてやって下さい。

(農・図・島田)

あ と が き

◇ 夏やすみも終り、本格的に研究、勉強される9月をむかえた。本館大閲覧室の冷房装置も夏中大きな故障もなく、おかげさまで連日満員の盛況が続けてきたが、朝夕は秋の気配が漂いはじめて、そのお役目を終る日も近づいた。川口先生の巻頭にもあるように、この方面の施設がおくれている現在、それなりの役割りを果たしてくれたということである。

◇ しかし、本館の学生用図書費が、全学図書購入費に対し非常に僅少にすぎないという事実をはじめ、多くのたちおくれと、サービスの不十分さはおおうべくもない。次号は読書週間の11月でもあるので本学の読書施設などについて意見、不満があれば、文章にして何卒最寄りの図書室へお渡し願いたい。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 4, No. 3 (通巻18号) 1967年9月15日発行・編集発行人：岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表77-8111 (内線) 2220-2238